自閉症児の自我形成…事例研究

川瀬泰治

ワロン（5）は「主体による自己の意識化、つまり〈私〉という言葉にまとめられる事柄が、しばしば心理学の礎石であり、基本的公準である」としている。自己を意識するということ、つまり一般的には自我機能とよばれるものが、心理学研究の最重要課題であるというわけである。しかし、従来の心理学の分野では自我機能は必ずしも中心的なテーマとして考えられてきたとはいい難い。むしろ精神分析学のテーマとして預けられてきた感がある。発達心理学においては、自我の芽生えの時期や自我の働きの発達的変化を扱った研究があるが、それらも自我機能を知覚や認知、記憶などの精神機能と並ぶ一つの能力として捉えたものであり、ワロンのいうようなすべての精神機能の基盤としての見方は希薄であるといえよう。

ワロンのいうように自我機能は人間存在にとって根本的であるとすると、生存のために不可欠の空気が普段気づかれないのと同様に、かえってそれを研究対象として対象化することが困難なのかもしれない。心理学の領域でそれにふさわしい扱いを受けてこなかった理由もこのあたりにあるのではないだろうか。木村（4）は精神分裂病を自己の自己性の障害と規定し、分裂病において機能不全となった自己が、かえって普段自明のものとして意識化されることのない自己の姿を浮きぼりにしてくれるものだとして、分裂病研究の意義を強調している。自閉症は発達の初期から広範な精神機能の発達障害がみられるが、その障害の中核となるのは自我機能の障害だと考えられる。分裂病は思春期発病が多いとされているが、いったんは曲りなりにも自我機能が形成された後、崩壊していく状況であるのに対して、自閉症は発達の初期から自我機能の発生自体が障害を受けているといえよう。したがって、自閉症の自我の発達を研究することは、健常児の場合には迅速に容易に達成されるために見落とされてしまう、自我の発生の段階を浮きぼりにしてくれるものと思われる。

このような観点から筆者は従来、自閉症児の自我形成を研究して来た。その際、単に自閉症児の症状を正常な機能からの逸脱としてみるのではなく、特有な症状を詳しく記述し、その生起メカニズムを解明することで、普段表に現れない正常な統制された機能の実態が示唆されるようにと心がけてきた。そして、自閉症児によくみられる常同行動に注目してきた（2）。自閉症児の常同行動を目にした時の我々の違和感は、我々のうちにある時間意識と関連しているとの観点から、時間意識の発生メカニズムと自閉症児の常同行動における時間意識の特異性を分析した。その結果、時間意識の発生の根源にある自己の問題に行きついた。自閉症においては根源的時間の生成が不全であり、その結果として自己が自己として成立しにくいのではないかとの結論が導き出された。

さらに、自閉症児の自己についてさらに追求し、自己はそれだけでなりたつものではなく、つねに他者の成立と相関的であるとの視点から、自閉症児における他者の問題を取り上げた（3）。自閉症研究の

分野で最近脚光を浴びている「心の理論」の研究は、自閉症児が他者の心について正しく理解することが困難であることを明らかにし、他者が独自の心を持った他者として現れていないことを明らかにした。しかし「心の理論」の研究においては、四歳ごろに出現するとされる心の理論がどのような経路で発生して来るのかについて充分検討されているとはいい難い。さらに他者と自己との関連についての視点が明確ではなく、他者が他者として現れていないことによって、その結果として自閉症児の自己がどのようになるのかという点が明らかにされていないという問題を指摘した。そこで心の理論が発生する以前の段階における対人的な関わりを分析した。そして、心の理論でいう概念的な他者理解ではなく、概念以前の身体レベルでの情緒的、共感的な交流が重要である事が指摘された。

浜田（7）によれば、身体と身体が出会った時、自分と相手は別々の身体を持つという点で個別的であるが、同時にやはり同じ身体どうしという点で共同的である。このような両義的な身体どうしが関わるところで自我が発生する。また浜田は、人と人がいっしょに一つの対象を体験する〈原初的な共有状況〉を三項関係と呼んで、意味世界形成の源であり、自己と他者の成立する母体だとしている。また、人は最初からその身体そのものにおいて本源的に共同的であり、その共同性をもとにこの三項関係が成り立つとしている。さらに、現象的身体における共同性の面には同形性と相補性という両契機が働く。同形性とは、出会った身体どうしがたがいに同じような姿形をとってしまうという現象であり、相手の身体の姿勢・運動に対して自分の身体が無意識に感応して同じ形をとるというものから、意識的に模倣する場合まで含まれる。一方、相補性とは、身体と身体が出会ったとき、相手の身体が自分に向けて能動的に働きかけてくるその働きを受け止め、また自分が相手の身体に向けて能動的に働きかけたとき、相手がその働きかけを受け止めることを見てとることだという。

また市川（1）によれば、身体レベルでの通じ合い（同調）には、同型的同調と相補的同調があり、この両者が円環をなすことによって、より深いレベルの同調に達する。そして、より深いレベルの同調によって共同主観的な場が生成し、人と人の対話が可能となる。先の研究では、身体レベルでの通じ合いにおけるこの二つの契機が、自閉症の世界を理解するうえで鍵となるのではないかとの観点にたって分析を進めた結果、自閉症においては、なんらかの理由により、同型的同調と相補的同調の円環が断ち切られており、したがって他者との間に共同主観的な場が生成しにくいのではないかとの仮説が導かれた。そして、自閉症においては自己や他者が分化する以前の非人称的で根源的な共生の世界にあり、他者との相互主観性を元に可能になるはずの他者との共感ができない世界にあるのではないかとの仮説が導かれた。

本稿ではこれらの仮説に基づいて、実際の自閉症児における身体レベルでの他者との交流を分析し、自閉症児における共同主観的な場の実態、他者の現れ方、自己の生成について検討し、さらに自我形成の原初的段階についての理解を深めたい。以下の事例研究では、現象的身体における共同性の両契機である同型性と相補性に依拠して具体的な観察をおこなうことにする。

事例

対象となるのは養護学校高等部在籍のK、男児十七歳一名である。二歳の検診時に小児自閉症と診断された。就学時期（昭和六十三・四・五）には県児童相談所による障害の判定では、障害の程度がA2と判定され、その後の定期診断でもこの判定に変化はない。知的障害の程度はかなり重度で、ことばの遅れが顕著である。言語表出に関しては、いろいろ要求を表すのに「オイデ」、気にいらないことがあると

強い情動表出を伴って「イヤ」、痛い時に「イタイ」など数語が認められる程度である。言語理解に関しては、具体的な身辺の事物をあらわす名詞の理解はかなり多いが、動詞や形容詞、副詞については制約が多い。形容詞の中でも「赤い○○」といった具体的なものはある程度理解できるが、「大きい―小さい」「長い―短い」といった抽象度の高いものは理解が困難である。従ってことばによる他者とのコミュニケーションにはかなり制限があり、要求がある時にのみ、マジックハンド（相手の手をとって欲しいものの方に差し向けるなど）やものを直接提示するなどの初歩的なコミュニケーションをとる。

家庭内では普段、紐を使った常同的な遊びやパソコンのゲームソフトの画面をマウスを使って変化させるなどの常同的な遊びを繰り返している。ポップス系の音楽を好み、同じCDを繰りかえし聞いている。また紐遊びも音楽を聞きながらすることが多い。このような遊びに他者が介入する事を嫌うので、その間は他者とのコミュニケーションはない。しかし、近くに人がいないとこのような遊びも長続きしないという傾向がみられる。Kは筆者の実子であり、主として家庭内での日常場面における筆者との交流を主として分析の対象にする。

同形性に関する行動

共鳴動作 co-action

共鳴動作は、生後数日の乳児ですでにみられる。例えば眼の前で母親が口を開け閉めすると、それにつられるように口を開けるなどである。これは一見模倣のようにみえるが、この段階の乳児ではまだ相手の口と自分の口とを対応させることはできないし、相手の口の位置や動きを表象的に自分の身体におきかえて、意図的にまねようとする模倣とは明らかに異なるものである。この行動がどのようなメカニズムで生じるかは不明だが、浜田（7）は本源的共同性と呼んで、人と人が最初からその身体を通して応じあうことが予定されていることの現れだとして重視する。このような現象は乳児だけでなくおとなにも広くみられる。たとえばあくびがうつるとか、ひとが車にはねられそうなシーンを見ると身をすくめる、などである。

共鳴動作は、身体レベルでのコミュニケーションのもっとも原初的なものであり、また他者との共同主観的な場を形作る基盤だと考えられる。そこで、まずKにみられる共鳴動作に関する行動を取り上げよう。

（1）父親が右腕を怪我して、二の腕が内出血で赤黒く腫れ上がった。シャツのそでをめくってみせると、脅えた表情をしながら逃げる。さらに眼の前に腕を差しだして見せようとすると、目をそむけたり目をつぶったりする。まためくられたシャツのそでを自分で元に戻して患部を隠そうとする。

（2）人の足を踏んだ瞬間に力を抜いて力が加わらないようにする。あるいは、父親の手をつかんだままエレベーターに乗りこみ、父親がまだ外にいてドアが閉まり始めた時に、父親の手を離して外に押しやり、ドアにはさまれないようにする。

（3）廊下で「イタイ」「オギャーオギャー」などと訴えるように大声をあげている。急いで行って見ると、片足を宙に浮かして痛そうにしている。足の裏に押しピンが刺さっている。抜いてやろうとすると、嫌がって押しのける。助けて欲しいけれども、抜く時にさらに痛くなるのは嫌だというジレンマの状態のようだ。押しピンをよくみると、刺さっているのではなく、ただ足裏のくぼみのところにくっついているだけであった。すばやく取りのぞいてや

ると、自分が勘違いをしていたことに気付いたようで、すぐ騒ぐのをやめた。

(4)赤ちゃんの泣き声や小さな子どもの苦しむ様子を実際に見たり、テレビの画面で見たときに、いらだって自分の体をつねったり近くにいる人をぶつ、あるいは身近なものを叩いたり蹴ったりする。

1の例にみられるKの共鳴動作は、本質的に我々と変わりはないようにみえる。このような同形性は、身体レベルで人と通じ合うためのもっとも基本的な要件だと考えられる。人の怪我を見た時、我々は一般に「痛ましさ」とか「おぞましさ」といった感情を持つが、その時、身のすくむような痛みのような身体感覚を伴っている。これは、相手の身体に自分の身体を重ねて、相手の身体に生じている異変を反射的に自分の身体に移し入れて感じるということであり、共鳴動作の一種だと考えられる。Kの主観的体験を直接知る事は出来ないが、表情や振る舞いから、人の怪我に対して上記のような身体感覚を伴った感情を持つ事が推測される。ちなみに、テレビで犬の手術のシーンをみていて、メスで腹部を切開する様子をみた時にも同じような反応がみられた。

2は一見、相手を思いやる行動のように思えるが、むしろ相手の身体の痛ましい状況を予想し、それが自分の身体にもたらす痛ましさを予想して未然に防いだものと考えられる。この場合は実際に眼の前で起こっていることではなく、表象的な作用に基づくものと考えられ、先程の例と比べると発達的には進んだ段階のものと考えられる。

3の例では、実際の痛みはなかったはずであるが、他者の身体に対して感じるのと同じ原理で自らの身体に対して共鳴動作的に痛みを感じたものと思われる。このようなことは、例えば、注射を打たれる時に、腕に刺さる注射針をみつめていると強い痛みを感じるが、見ないようにしていると若干痛みが弱まるなどのように、我々でも普通に体験することである。この場合に、自らの身体と他者の身体とは同じ感情を引き起こす点で区別がないといえるのではないか。またそれが自他の身体を重ね合わせることで生成する共同主観の場の基盤だと考えられる。

4は、これまでにとりあげた同形的行動と比べると、奇異な印象を与えるものである。ここでみられるのは明らかに怒りの感情であるが、我々は普通このような状況で怒りはあまり感じないであろう。むしろ悲しさとか苦しさとかあるいは一般的には可哀想といった感情を抱くのではないだろうか。相手の情動表現に触れて反射的に同じ情動を持つ、いわゆる情動の感染現象は、反響動作の一種と考えられるが、感染される情動の種類がKと我々では異なるように思われる。この違いは、我々おとなの場合に、感染した情動が間接的になるからではないだろうか。赤ちゃんが泣くときは、不快な状況に対する怒りの要素がかなり強いと思われるが、我々が赤ちゃんの泣く様子を目にした時、最初は赤ちゃんの情動そのままに、怒りに近い情動を体験するが、相手と自分の立場の違いから一歩距離を置いた情動にシフトするのではないだろうか。Kの場合は相手の情動がより直接的に伝わるものと考えられる。

模倣

模倣は同形的側面が受容・了解にとどまらず、能動的活動として前面に出たものであり、相手の姿形や動作を意識的あるいは意図的になぞろうとするものであり、無意識的な反響動作とは区別される。その点に留意してKの模倣を選んだ。

(5)ばいばいと手を振る。自閉症児の場合には、手のひらが内側に向

くばいばいがよくみられるが、Kの場合は普通どおり外に向いている。ただ腕全体を前後に動かすというやりかたである。自分からすることはなく、人から促されてする。

(6)写真を撮られるときに、写真を撮ろうとする人のまねをする。目をつむって両手でカメラを構えるしぐさをする。

(7)対面して目、口、耳、などの部分を指でさしてまねをしてと要求すると、自分の対応する部分を指すが、鏡映像のように左右が同じ側になる。

(8)単語をまねさせようとすると、音節とイントネーションだけほぼ正確にまねするが、各音節の発音はかけ離れている。

(9)昼間学校でクラスメイトがサッカーの遊びをしているのを思い出してしたものと思われるが、夜家庭でサッカーのドリブルのまねをする。身のこなしはなかなかリアルである。いわゆる延滞模倣であるが、これに似た例として、グランドを散歩している時、野球の道具がおいてあったらそれを勝手に拾い上げ、自分でボールを高く投げておいてからバットを振って当てようとする行動もみられた。

Kの模倣は一般的に稚拙であり、不完全であるといえよう。5のばいばいのしぐさにおいて、自閉症児では手のひらの向きが逆になることがよく知られている。自閉症児では他者の視点をとることができず、自分からみた時の相手の手のひらの状態をそのまま模倣するのだと考えられている。5にみられるようにKの場合には普通のばいばいと同じやりかたなので、他者の視点をとることができるようにみえるが、これは単に模倣の仕方が粗雑であり、相手のしぐさをよく見ていないか、あるいは相手の姿形と自分の姿形との照合に無頓着であることによると考えられ、6や8でもその特徴がみられる。また相手の視点を把握できないことは7の例においてはっきりと現れている。

相手のまねをするということは、相手の身体の姿形や動作に対して、自らの身体の無意識的な感応を相手の姿形と比較しながら意識化し調整することにより、より正確な模倣になると考えられる。このように模倣は、自己意識と他者意識の成立をある程度前提にしているので、自閉症児では、前述の共鳴動作と比べると模倣の方が困難だと思われる。9は延滞模倣の例であるが、他者の姿形や動作を表象しそれをなぞる行動だと考えられる。

Kは自分から進んで模倣することはまれであり、促されてすることが多いし、相手の姿形や動作の模倣を相手に向かって表現しようとの意図は感じられない。したがって、互いに相手のまねをし合うまねっこあそびにはならない。

相補性に関する行動

目が合うこと

目が合うという現象は、向かいあった二人の人間がお互いに志向性を向け合うことである。つまり、双方ともに自分が相手に意識を向けていると同時に、相手も自分に意識を向けている事を知るということで成り立つ。二人の人間が目を合わせる状況で一番多いのは、会話の初めであろう。まず、相手に向かってこれからあなたに話しかけるのだという合図として視線を送り、それと同時に相手がこちらの話しをきく準備があるかどうかを確かめるのである。また聞く方は、視線を返すことで、聞き手として意識をそちらに向けているのだという合図

を送るわけである。また、会話の途中や終わりにも、相手の意識が継続しているかどうか、話しが伝わったかどうかを時々目を合わせながら確認している。このように、目が合うということは、会話の基盤として働いている。

自閉症児で、話し言葉がかなりある場合でも会話が成り立ちにくく、誰に話しかけているのか、また相手の話を聞いているのかどうか分からないというのは、会話の際に視線を通じての志向性の向け合いが不確かだからと考えられる。また、自閉症児の特徴として目が合わないということがよく言われる。確かに自閉症児では目が合う時間が短いということを明らかにした研究（8）もあるが、しかし自閉症児でもまったく目が合わないわけではなく、むしろ合い方に特異なものがあるように思える。目が合わないという印象は、目の合い方における量的な側面というよりも、質的な側面に問題があるのではないだろうか。Kの場合も目の合いかたには独特なものがある。

(10)正面から目を合わせるのではなく、顔を横に向けて目を細めながら目の端からこちらを見る。また、ふと気付くと目の端でこちらをみていることがあり、こちらと目が合ったらすぐ目をそらす。

(11)呼びかけた時にこちらの目をみない。明らかにこちらに注意は向けているが、視線がこちらを通り越して後の方に行く。

(12)いろいろな要求を伝える時に、こちらの目を見ない。目を見ずに相手の手や肩をつかんで動かそうとしたり、リモコンを差しだしたりして要求を伝える。この際に「オイデ」ということが多い。

(13)人の視線を嫌がり、何かの拍子に急におびえたように目を閉じて両腕で頭を抱えるようにして目を塞ぐことがある。自閉症児によくみられるという典型的な視線忌避（gaze aversion）であろう。

以上は文字どおり目が合いにくい例であるが、まれに尋常でなく長く目を合わせることもある。その場合、感情の伴わない無表情な視線であり、普通の対人関係でみられるような、目が長く合い過ぎる場合の落ち着かない気分を生じさせることはない。

(14)意志の疎通を確認するような目の合い方もある。例えば、Kは父親とドライブに行くのが好きであるが、父親がドライブに誘うと、目をのぞきこんで確かめるような視線を送ることがある。

11～13にみられるように、Kの場合は視線を通じて相手と相互の志向性を向け合うことにかなり大きな困難があることが分かる。しかし、14のように、伝えるべき要求が明確な場合にはしっかりと目が合うことも分かる。

目が合うということにおいては、自分は相手を見る主体であると同時に相手から見られる客体でもあり、また相手は私に見られる客体であると同時に私を見る主体でもある。このような相互に主体であり客体であるという関係は、目が合うという現象だけでなく、身体的な関わりでは一般的にみられることである。例えば、握手においては自分が相手の手を能動的に握るのと同時に相手によって手を受動的ににぎられている。ここで次の例としてKの握手をみてみよう。

握手

(15)手を差しだして握手しようと誘うと応じて手を差しだしてくる。学校で先生や子どもどうしでよく握手をし合っているので習慣化しているようだ。しかし、Kの握手は指を伸ばしたままじっとしていて相手から握られているだけである。自分から握り返して来

るということがない。握手がちょっと長くなると手をよじって逃れようとする。

Kの握手は、前述の目が合う現象と非常によく似ており、相手の能動を受動として受け止めるだけで、相手の能動を自分の能動として相手に返し相手の受動を感じるという面が欠けているといえよう。目があうということや握手においては能動と受動のやりとりが同時的であるが、それが経時的に交わされる例を以下にみてみよう。

キャッチボール

(16)あまりキャッチボールは好まないので、自分からはじめることはまずない。ゴムのボールを使って誘うとしかたなしにつきあうが、長続きはしない。キャッチボールがどのようにするものかは理解している。むりやりに誘って始めたとしても、Kとのキャッチボールはとてもやりにくい。投げたり受けたりのタイミングがとりにくい。特にボールの受け方がへたである。受け取る動作がおくれがちで、おなかのあたりに当たってしまう。投げる場合は、こちらの状況におかまいなしにいきなり投げてくる。コントロールはいいので受け取るのに楽である。時々離れたあたりに投げることがあるが、これは続けたくないという時にするようである。あまりしつこく誘うと怒ってかんしゃくを起こす。

やはりここでも志向性のやりとりができていないという特徴が顕著である。投げる前に、まず視線をおくるのだが、それがないためにいきなり投げてくるという印象がある。受け取る時も、相手が送る合図を受け止めていないからとっさに対応ができなくて、受けそこなうことが多い。

自己性、他者性の芽生えに関する行動

以上、同型性と相補性の両契機に基づいて、具体的な行動を取り上げて分析してきた。さらにここで、補足として自己性や他者性の芽生えと思われる行動を取り上げてみよう。まず、他者のパースペクティブの把握に関連した行動について、いくつかとりあげてみよう。

くすぐり反応

脇腹や足の裏を人にくすぐられるとくすぐったいが、自分でくすぐってもなんともないのはなぜか。市川（1）によれば、これは他者によって把握された私の身体として、私がとらえる身体という、身体の第三の側面がかかわっている。ここでは主体としての他者の身体の把握が前提になっているので、他者性の芽生えが問題となる自閉症児におけるくすぐり反応を調べるのは意義のあることであろう。

(17)Kの場合、脇腹をくすぐると身をよじって笑うというごく普通の反応がみられる。しかし、あらかじめ声をかけたり身体接触をしたうえでくすぐる必要があるし、全般に反応は鈍い。

我々の場合でも、くすぐったさというのはかなり微妙なものであり、物理的刺激があれば反応が起こると言うものではない。親しい間柄というものが必要だし、また好意的な楽しいふざけた気分があってはじめてかんじるものであろう。Kの反応をみると、他者性の芽生えといったものがあるといえるのではないか。

ものを隠す

(18)紐遊びは決まった手順で紐を作ることから始まる。まず一メートルぐらいの紐を探して来て、それとほぼ同じ長さのトイレットペ

ーパーを両端で結んで輪にする。紐とトイレットペーパーの結び目の片方に靴下や乾電池などいろいろなものをくっつけておもりにし、そのおもりを投げては引き寄せるという繰りかえしである。この遊びに使う紐を次々と替えていくのだが、一時靴の紐を用いた時期があった。家にある靴の紐を全部両方とも外してしまうので、外出の度に紐を結び直さなくてはならず、大変不便であった。外す度に叱っていると、こっそりと玄関に行ってすばやく紐を外し、外した紐をまるめて手のひらの中に握り、その手を体の後ろに回して帰ってくる。そしてトイレットペーパーを準備する間、その紐を座布団の下にさっと入れてしまう。

人の目を盗むこと、隠す、うそをつくなどは、他者の視点を把握してその裏をかくという行動であり、自己意識と他者意識の成立を前提にしているはずである。これまでのKの自我の状態からみると、意外なことに、この例ではかなり明確な他者のパースペクティブの理解がみてとれる。

指差し

(19)他者がする指差しに対しては、ある程度の理解はみられる。例えば、Kが手に持っているものを、あそこにとかここにと指差しで置く場所を指示すると、それに従って机や棚の特定の場所に置く事ができる。また、指差しで行き先を指定すると、ひとりでそちらの方に行く。しかし、物理的な距離に制限があるようで、遠くの建物を指差しても分からないようである。対象が遠い時にはそっちを向かずに、指差しのしぐさをまねしたりする。

(20)自分から相手に何かを示そうとして指差しをすることはほとんどない。希に、家の中のテレビやタンス、蛍光灯などを指さしてその名前を言うように要求することがある。しかし、ものの名前を本当に知りたがっているというのではないようである。ひと通り名前を聞いた後、また最初に戻って同じ順番で聞いていくということを何度も繰り返す。

指差しは、三項関係に付随するものであり、相手と同じものを同時にみるための補助として用いられる。したがって、指差しは身体レベルの共同性を表すもっとも重要な指標であると思われる。20にみるように、Kは対象物の距離によって左右されはするが、相手の指差した対象に注意を向けることができる。相手の志向性の把握はできているようである。しかし、21でわかるように、指差しが自発的になされることはほとんどない。この例では、一見自発的な指差しがなされているような印象を与えるが、おそらく、以前誰かが「これはテレビ」「これはパソコン」などと指差しながら教えようとしたのを思いだして、延滞模倣としてやっているだけのようで、単なる機械的な常同行動の一種だと考えられる。相手の志向性は把握できても、自分の見ているものを相手にも見て欲しいという欲求はおそらく欠けており、志向性のやりとりにはならないものと思われる。

羞恥心

羞恥心という感情は、自我機能と深く関わるものであり、市川(1)が「主観としての他者の体験が羞恥である」というように、他者の成立を前提としている。他者からの否定的な評価を意識した時に羞恥心が生じる。しかし、ここで主観としての他者というのは、対象としての具体的な他者でもあるが、内なる他者といわれるものでもある。浜田がいうように、自他二重性は自我二重性と相即するという観点からみれば、実際の他者と内なる他者とは同じだからである。このような自他の分化があってはじめて羞恥心が生じるのである。したがって、自閉症において根本となる障害が自我機能の発達にあるとすれば、自

閉症児の羞恥心に問題が生じるのは必然であろう。そこで、Kの羞恥心について分析を試みる。

(21)家庭では上半身裸でいることが多いが、外出時や学校では服を着ている。家庭では紐遊びを長時間続けるが、学校ではほとんどしない。また、家庭ではよく性器に手をやったりするが、外出時や学校ではしない。このように家庭の内と外を区別して、外ではいろいろな行動を抑制している様子がみられる。

照れて赤面するとか、はにかみ笑いをするといったことがKの成長の過程を通じて殆どみられなかった。成長してからは人前で服を脱いだりすることはなくなったが、しかし内なる他者の評価を気にしているという様子はうかがわれない。おそらく、単にしつけが習慣化したにすぎないであろう。というのは、時折、夏場に暑くて人前で裸になる時も時折あるが、恥ずかしがる様子はみられないからである。羞恥心は主観的な感情体験であるから、本人が実際にどう感じているかを完全に知る事はできないが、客観的な面に限ってみればKには羞恥心はみられない。しかし、そのような中で唯一羞恥心の芽生えと思われる次のようなエピソードがある。

(22)学校で、若い女の先生の前では殊勝にしてよくいうことをきく。きらいな歯科検診の時に、その先生に促されると素直に診察台に仰向けになった。

病院で診察を受けたりするのを非常に嫌うKは、診察台に乗せるのにいつも大変な苦労をするが、自分から乗っていったというのは、その先生によく思われたいという気持ちがあり、いつものように診察台を前に暴れるのを先生にみられるのが嫌だという気持ちがあったのではないかと思われる。しかし、Kには二歳年上の姉がおり、その姉の言う事を素直にきくという傾向があるので、年齢の近いその先生に対して同じような態度をとった可能性もある。

所有の意識

これまで他者意識の芽生えについてみてきたが、自己の成立と他者の成立は相関しているという観点から、ここで最後に、自己意識に関わるものとして、所有の意識についてとりあげる。

(23)衣服や靴、鞄などの学用品は自分のものを識別していて、家庭でも学校でも取り違えるようなことはない。しかし、クラスメイトが間違ってKの学用品を手に取ったりしても、とりたてて反応しない。

(24)自宅では自分専用のパソコンを与えられており、紐遊びと並んで多くの時間をこのパソコンで音楽を聞いたりゲームソフトを操作して過ごす。使用中に誰かがパソコンをいじろうとするとつよく抵抗する。また、使用していない時に誰かが使っていると取り返そうとすることがある。

浜田（6）は、所有的関係があって、これが他者関係のなかで相互に認知されるところから「自我」の一端があらわれてくるのではないか、として幼児期の所有意識の役割を重視している。23にみられるように、一応学用品などについては「自分のもの」という意識はあるようであるが、人に取られてもさほど抵抗がないようであることから、あまり強くはないようだ。しかし、24の例では弱いながらも自分のものに対するこだわりが感じられる。

考察

筆者が主として家庭において、親子として自閉症児Kと日常的に関わるなかで、身体レベルでの通じ合いに関連すると思われるエピソードをコメントとともに列記してきた。それらをもとに、自我機能の発生初期において、他者との情緒的・共感的通じ合いがいかなる意義を持つのか考察する。

はじめに、共同性の両契機である同形性と相補性との関連をみてみると、同形性に関する行動はかなり良好に保たれているのに対して、相補性に関する行動は逸脱が大きいという特徴が目につく。この結果は、自閉症児が同形的活動よりも相補的なやりとりに困難を持つという浜田（6）の主張とも一致する。それでは自閉症児ではなぜ相補的な活動が難しいのだろうか。

市川（1）は、同型的同調が内面化されることによってはじめて相補的な同調が可能になる、としている。とすれば、自閉症児で相補的な活動が困難なのは同形的活動の内面化に問題があるからだということになる。それでは同形的同調の内面化とはどういうことなのか。それについて市川は次のような例をあげている。

「バレリーナの踊りをみているとき、われわれはバレリーナの優雅な動きを目で追っているのみならず、その形態のメロディとリズムを少しずつ先取りしている。そこで予期に反してバレリーナが失敗したときには、私は自分の身体がつまずいたような不快感をおぼえ、自分がすでにその少し先までバレリーナの動きを内面的に素描していたことに気付くのである。」

共鳴動作は相手の姿形や動きに対して感応して顕在的に自分の姿形が同形的に活動する現象であるが、その活動が潜在的になり、その潜在的な同形的活動に対して、相補的ないし応答的にやりとりをすることが可能になる、というのが同形的同調の完全な内面化である。そして、同形的同調と相補的同調が円環をなすことによって、より深いレベルの同調に達し、共同主観的な場が生成し、対話や合奏が可能となるとしている。

ここで本事例の相補的活動に注目してみると、自閉症児特有のやりとりの難しさが顕著である。目があうこと、握手、キャッチボールと三つの例をとりあげたが、いずれにおいても相手と志向を向け合うことが難しいことを如実に表している。相手がこちらを意識しているのかどうか分からない、またこちらが相手に意識を向けていてもそれを受け止めているのかどうか分からないという印象がある。これは、一般的な意味での意思の疎通の困難を感じさせるが、それだけではなく独特の疎隔感をもたらす。例えば、これはKに限らず、自閉症児に共通して感じるものであるが、Kとの距離感があやうくなり、実際にはすぐ近くにいるのに遠くにいるように感じる錯覚や、Kが泣き叫んでいてもいっこうにこちらの感情が動かされないといった経験をすることがある。

市川は、同調の能力が失われる場合には、世界は深さをもたない単なる延長、よそよそしく冷たい芝居の書き割りのような単なる表面となり、私は世界のいかなる存在とも共感することができなくなる、としている。これは分裂病の典型的な症状として述べられているが、おそらく、自閉症児本人もこれと類似の体験をしており、また自閉症児を前にした時にわれわれが感じる前述の離人的体験とも同質のものであろう。

このように、Kにおいては相補的ないしは応答的やりとりがきわめて困難であるが、それは同型的同調の内面化がなされないためであろう。ここで、Kの同型的行動をみてみよう。同型的行動のなかでも、共鳴動作に関してはかなり正常な反応がみられる。しかし、その種類は限定されていて、痛みや身体的苦痛に限定されているように思える。また、同じ同型的行動のなかでも、模倣では異常な点が目立つ。模倣しようとの意図はあるが、模倣すべき相手の行動との食い違いが

大きく、いかにも大雑把で不完全である。模倣は自分の同型的行動と相手の行動との比較や調整をすることで次第に正確なものになっていくと思われるが、その比較や調整が充分になされていないという印象がある。その時比較されるべき相手の行動とは、実際に目の前にいる相手というよりも、自らの内の潜在化された同型的同調に他ならないのではないか。そして、模倣が不正確であるのは同型的同調の内面化が充分になされていないことを表すものではないだろうか。このようにして、Kの模倣は顕在的なものに留まっており、それとの間に相補的なやりとりを行える状況にはないものと思われる。

通常の人間関係においては、内面化された同型的同調と相補的ないし応答的なやりとりを通じて深い同調のレベルに達し、相手と同じ仕草や表情、発声、などの行動様式が形作られ、深いレベルのコミュニケーションが可能となるための基盤となるのであろう。それはまた家族、親族、地域社会、国などのさまざまなレベルの共同体で共有される行動の同型性の元になるものでもある。自閉症においては、同型的同調が顕在的で反射的なレベルに留まっているために、深い同調に達することが困難であり、痛みや苦痛などの原始的な同調に留まっているのではないかと思われる。そして、共同体に共有されている共同主観的な場を共有することが困難となり、他者と身体レベルでの情緒的・共感的な通じ合いが困難になると考えられる。

このように、自閉症児では同型的同調の内面化が不十分なために相補的行動が困難であることが示唆されたが、一方、延滞模倣は同型的同調の内面化の兆しとなるものではないかと思われる。確かに、延滞模倣は状況にそぐわない機械的な模倣であるが、他者の姿形や動作を間接的・表象的に素描する活動である。延滞模倣は同型的活動が潜在していく途中の過程にあるものと考えられるのではないだろうか。

また、Kの観察記録のなかに、他者性をうかがわせる事例がある。それは、くすぐりに対する反応や指差しを理解すること、またものを隠す行為である。これらは他者のパースペクティブを意識した行動と思われるが、一方で同じ他者性の指標である羞恥心はほとんどみられない。また、自己性の意識である所有の意識も充分にあるとはいえない。これらのことから、Kにみられる他者性は、我々の他者性と同じものかどうかに疑問が生じる。普通の自我形成においては、自己と他者が共同主観的な場から生成するのに対して、自閉症児においては、他者性が条件反射的な学習によって間接的に形成される可能性もあり、今後検討が必要であろう。

引用文献

（1）市川浩　1992　精神としての身体　講談社学術文庫

（2）川瀬泰治　1997　自閉症児における常同行動の意味について　別府大学紀要　第38号21-26

（3）川瀬泰治　1997　自閉症における自己と他者　別府大学紀要　第39号33-40

（4）木村敏　1973　異常の構造　講談社現代新書

（5）浜田寿美男　訳編　1983　ワロン／身体・自我・社会　ミネルヴァ書房

（6）浜田寿美男　1992　「私」というもののなりたち　ミネルヴァ書房

（7）浜田寿美男　1999　「私」とはなにか：ことばと身体の出会い　講談社

（8）S・J・ハット／C・ハット（編）平井久（監訳）　1979　自閉児の行動学　岩崎学術出版社